

非即席原稿付き日中同時通訳における
日中翻訳手法応用の可能性についての考察
—温家宝首相国会演説を例に—

丁 紀祥

(大阪大学言語社会研究科通訳翻訳学専修コース博士前期課程)

1. はじめに

原稿読み上げ型同時通訳は、事前に演説原稿を入手・翻訳して、通訳現場で演説者の発話テンポとスピードおよび発話状況に合わせて翻訳原稿を読み上げるという形式の通訳である。事前に入手した原稿を用いてある程度の準備をすることはできるが、原稿読み上げ型同時通訳は決して簡単でやりやすいとはいえない。通訳者にとっていくつかの「難所」が考えられるからである。例えば、演説者または発話者は既存の原稿を読み上げるだけであるため、考えながら話す場合と異なり、徐々にその発話スピードが速くなってしまふことがある。また原稿を読み上げるため、発話者の感情移入が難しくなり、通常の発言では感情を汲み取りやすい皮肉やジョークなどの特別な表現がメリハリのない「朗読」に隠れてしまふことも起こる。さらには、事前に入念に原稿を準備することで「情報量過多」の発話になることもある。また、演説やスピーチであるにもかかわらず書き言葉特有の堅い表現になる、などがあげられる。

このような同時通訳では原稿を事前に翻訳することから、通訳とはいえ、翻訳の手法および技巧と何らかの共通点があると考えられる。日中翻訳の手法を原稿読み上げ型の日中同時通訳に応用することは可能だろうか。本稿は中国・温家宝首相の日本での国会演説における同時通訳を例に分析をする。

2. 中日翻訳技法

日中・中日両言語間の転換方式手法については、遠藤紹徳（1989）が提示した7種類の日中・中日翻訳技法に基づいて起点言語と目標言語の相違点を分析することができる。同書では遠藤自身の翻訳技法を土台に研究を進め、中日翻訳における一般的な技法として以下の七項目を挙げている。

- a) 加訳：原文にない言葉を付け加えて訳す。減訳の反対の技法。
- b) 減訳：原文にある一部の言葉を訳さない。「不訳」とも言われる。原文の意味を損なわないという前提のもとに訳文を分かりやすく的確な表現にする。加訳の反対の技法。
- c) 反訳：肯定形+肯定形の表現を否定形+否定形の表現にしたり、またはその逆の処理をしたりすること。主に仮定や条件を表わす従属節とその結果や結論などを表わす主節において両方とも肯定で表現するか、それとも両方とも否定で表現するかの問題である。
- d) 変訳：翻訳の際に原文の中の一部の品詞を変えたり、文の成分を変えたりすること。

Ting Chi Hsiang, "Application of translating strategies to the so-called "Prepared Simultaneous Interpreting" between Japanese Chinese : Analysis of Chinese Premier Wen Jiabao's Speech at the Diet of Japan." *Interpreting and Translation Studies*, No.8, 2008. pages 379-393. © by the Japan Association for Interpreting and Translation Studies

- e) 倒訳：語やクローズやセンテンスの順序を後ろから訳しあげること。日中両言語はもともと語順が異なり（中：SVO、日：SOV）、表現の仕方にも違いがあるので、この技法はとくに重要である。
- f) 分訳：一つのクローズやセンテンスをいくつかに分割して訳す。日本語の長い連体修飾語を中国語に翻訳する場合、被修飾語を主語に立てた主述文として独立したセンテンスにすることが多い。合訳の逆の技法。
- g) 合訳：翻訳の際に、原文のいくつかのクローズやセンテンスを一つにまとめて訳す。分訳の反対の技法。

以上の七つの技法を一覧表にまとめて比較してみる。（表1）

表1 遠藤紹徳の中日翻訳の一般的な技法

技法	英語表記	別名	使用場面
加訳	Addition	増訳	日→中 日本語から中国語に翻訳する場合、主語や数量詞がほとんど加訳となってしまう場合が多い。
減訳	Deduction	不訳 略訳	中→日 加訳の反対技法なので、加訳の場面を逆に戻すと、減訳になる。
反訳	Mutual transformation of affirmative and negative	裏返し訳	日←→中 一般的に日本語では否定型+否定形の表現を好み、中国語では肯定形+肯定形の表現を好む傾向がある。
変訳	Variety in translation	転訳	日←→中 日本語と中国語のように、文法や表現法が大幅に異なる言語間の翻訳の場面で、この技法が良く使われる。
倒訳	Translation in reverse order	逆訳 ひっくり返し	日←→中 一般的に日本語では目的を表わすセンテンスを先に、中国語では目的を表わすセンテンスを後ろにする傾向がある。
分訳	Division/ Splitting	拆訳	日→中 日本語では長い連体修飾語の長文構造の表現を好み、中国語では短文構造の表現を好む傾向がある。
合訳	combination	併訳	中→日 分訳の反対技法なので、分訳の場面を逆に戻すと、合訳になる。

実際に通訳する際には一文に一方式を適用するのみならず、同時にいくつかの方式を使い、情報を処理する場合も多いだろう。

3. 実例分析

本稿では、2007年4月中国の温家宝総理が日本の国会を訪問し、原稿を読み上げる形式で演説を行ったときの同時通訳を用いて分析する。通訳担当者は中国語の発話を聞き、日本語の翻訳原稿を読む、いわゆる「原稿付き同時通訳」を行い、NHKで実況中継された。

通訳者は日本語母語話者で、高校から6年半中国に滞在し、日本帰国後通訳学校で学び、1989年から

会議通訳や放送通訳などに従事してきた経験豊富なベテランの通訳者である¹⁾。筆者は中国語原稿と日本語通訳をそれぞれ書き起こし比較対照することによって、どのような通訳技巧・手法が用いられたかを検証した。

3.1 加訳と減訳に関する分析

S03	我向在座各位向廣大日本國民致以親切問候和良好祝願
T03	まずはご在席の先生方をはじめ、日本国民の皆さまに対し、心から祝福とご挨拶をを申し上げます
S04	向長期以來爲中日友好做出寶貴貢獻的日本各界朋友表示衷心感謝和崇高敬意
T04	そして長年にわたって中日友好のために貴重な貢献をしてこられた日本各界の友人の皆さまに、心から感謝を申し上げますとともに、崇高なる敬意を表します
S17	日本人先後十多次派出遣唐使，阿倍仲麻呂便是其中傑出的一位
T17	また日本は十数回にわたって遣唐使を派遣しました。阿倍仲麻呂はその中のすぐれた代表者の一人です
S46	給中國人民的心靈造成的創傷難以用語言來形容
T46	中国人民の心に残した傷は言葉では言い表せない程のものがああります
S53	從自己的歷史經驗和教訓中學習，會來得更直接、更深刻、更有效
T53	自らの歴史の経験や教訓から学べば、より直接的、そしてまたより深く、より効果的にそれを得ることが出来ます
S141	近期雙方應該在能源、環保、金融、高新科技、資訊通信和知識產權等領域加強合作
T141	双方は当面の間、まずエネルギー、環境保全、金融、ハイテク、情報通信、知的財産権などの分野において協力を強化すべきです
S176	中國的發展主要靠自己，中國發展了會對周邊和整個世界的發展做出應有貢獻
T176	中国の発展は主に自分達の力に頼ります。中国が発展すれば、周辺と世界全体の発展にしかるべき貢献をすることができます

「加訳」において加えられた語の多くは、接続詞である。上記のように、「まず」(T03、T141)「そして」(T04)「そしてまた」(T53)などの接続詞を挿入すると、文と文のつながりがよりスムーズになる効果がある。接続詞以外では文の意味を補完するための加訳もある。例えば上記の「をはじめ」(T03)「代表者」(T17)「にそれを得ることが出来ます」(T53)「の力」(T176)という言葉をつけ加え、文全体の意味をより分かりやすくしている。

次に「減訳」の状況を見ていく。中国語から日本語に訳す場合、主語や数量詞が省略されてしまう場合が多い。以下に例文を挙げる。

S02	今天我有機會到國會演講，同眾參兩院議員見面感到非常高興
T02	本日は、このように国会において演説をさせて頂き、衆参両院の議員の皆様方とお会いする機会を得ましたことを大変うれしく思います
S43	曾被近代50多年那一段慘痛不幸的歷史所阻斷
T43	かつて近代の50年余りの痛ましい不幸な歴史によって断たれたことがあります
S172	但經過多年努力，我們找到了一條發展的新路子
T172	長年の努力を経て、われわれは発展のための新しい道を見い出しました

主語や数量詞以外に、ほかの「減訳」の例も見られる。たとえば以下の例文

S14	促進了各自的發展和進步
T14	それぞれ発展し進歩して参りました
S33	中國民主革命的先行者孫中山先生開展的革命活動
T33	中国民主主義革命の先駆者である孫文先生の革命活動は
S99	兩國友好城市多達 233 對，人員往來超過 480 萬人次
T99	友好姉妹都市は 233 組に達し、人的往来は 480 万人を超えました
S166	我們面臨著兩大任務
T166	われわれは二つの任務に直面しております
S181	中國高舉和平發展合作的旗幟，堅持走和平發展的道路
T181	中国は平和・発展・協力の旗印を高く掲げ、平和発展の道を堅持し

同時通訳は時間的制約のため訳出文字数をなるべく少なく抑えようとし、重要な情報を漏らさないことを前提に訳語を省略する。

S22	鑒真和尚把他認為能濟世度人的佛法傳到日本實現了多年的夙願
T22	鑑真和尚は衆生済度の仏法を日本に伝え、長年の宿願を果たすために

この例では一文で「他認為能」(S22)という連体修飾節を「減訳」し、「ために」(T22)という接続詞を「加訳」している。実際の通訳翻訳では一文に一方式を適用するだけでなく同時にいくつかの方式を用いることが S22 と T22 の例からうかがえる。

3.2 変訳に関する分析

「変訳」は今回の分析サンプルの中で多用される技法である。典型例は慣用句、ことわざ (S92、S110、S111、S179、S188)、常套句 (S195、T195) などである。

S92	中日合則兩利，鬥則俱傷
T92	中日両国は和すればともに利益をもたらし、争いあえばともに傷つきます
S110	中國古代先賢說，與國人交止於信，與朋友交言而有信
T110	中国古代の先賢は「 <u>国人と交わりては、信に止まれり</u> 」「 <u>朋友と交わりて、言ひて信あり</u> 」と言われました
S111	日本人也常說，無信不立
T111	日本の方々もよく「 <u>信無くば立たず</u> 」を口にします
S179	中國歷來有上德不尚武、講信修睦的優良傳統
T179	中国は昔から <u>徳を重んじ武力を重んぜず、信を講じ、睦を修める</u> というすぐれた伝統があります
S188	貴國有句諺語：盡管風在呼嘯，山卻不會移動
T188	お国には「 <u>風は吹けども、山は動かず</u> 」という諺があります
S195	謝謝大家
T195	<u>ご清聴</u> ありがとうございました

ことわざや慣用句を訳す場合、目標言語の中にある同じ概念を表すことわざや慣用句に転換することが多い。例えば中国語の「無風不起浪」は「風が無ければ波も立たず」と文字通りには訳さず、同じ概念を表す日本のことわざ「火の無い所に煙は立たぬ」をあてる。目標言語に対応する慣用句等がなければ原文の意味を訳すことになる。上記の訳し方は原文の意味から訳す方法である。

中国語の「世代」には、「ジェネレーション」「同じ年齢層」という狭い意味だけでなく、「永遠に」「いつの時代でも」という意味も含まれる（類似表現に「世世代代」「代代」がある。）。中国語の「世代」は日本語の「世代」とは完全には一致しない。今回の通訳ではすべて「変訳」の技巧を用い「子々孫々にわたる」と訳されている。

S40	值得倍加珍惜，代代相傳，發展廣大
T40	これをいっそう大切にし、子々孫々にわたって伝え、大いに発揚していくべきでありましょう
S93	實現兩國人民世代友好完全符合歷史潮流和兩國人民願望
T93	両国人民の子々孫々にわたる友好を実現することは、歴史の流れと両国人民の願いに完全に合致するものであり
S149	為兩國人民的世代友好播下希望的種子
T149	両国人民の子々孫々にわたる友好のために希望の種をまきたいと思います
S187	象徵著中日兩國人民世代友好的光明前景
T187	中日両国人民の子々孫々にわたる友好の明るい将来を象徴しています
S192	讓我們攜起手來為實現中日世代友好
T192	われわれは手を携えて、中日両国の子々孫々にわたる友好を実現するために

他に、以下にも通訳者が今回の通訳の中でたくみに「変訳」という技巧を使って、見事に通訳した例が見られる。

S19	與王維、李白等著名詩人結為好友
T19	王維、李白など著名な詩人たちと親交を深めました
S44	日本發動的侵華戰爭使中國人民遭受深重的災難
T44	日本が当時発動した中国侵略戦争によって中国人民は深く大きな災難に見舞われ
S60	1980年美穗子攜家人專程去中國看望聶元帥，這個故事感動了許多人
T60	1980年美穂子さんは家族とともに中国訪問し聶榮臻元帥を訪ねました。この話には多くの人々が心を打たれました
S63	把他們從死亡線上拯救出來，並撫育成人
T63	彼らを死の危機から救い出し、育てあげました
S72	就在幾座殘留的儲油罐旁，矗立著一塊石碑
T72	いくつか昔の石油貯蔵タンクの傍らに聳え立つ石碑があります
S86	強調以史為鑒不是要延續仇恨
T86	歴史を鑑とすることを強調するのは、恨みを抱え続けるのではなく
S116	不管遇到什麼情況，
T116	いかなる状況におかれようと、
S165	實現現代化還有很長的路要走
T165	近代化を実現するにはまだ長い道のりがあります

ここでは品詞を変えた例がいくつも見られる。例えば

- ・「攜」（動詞）（S60）→「とともに」（連語）（T60）
- ・「殘留的」（動詞連体修飾形）²⁾（S72）→「昔の」（名詞連体形）（T72）
- ・「仇恨」（名詞）（S86）→「恨みを抱え」（名詞・目的語＋他動詞）（T86）

また、能動表現を受動表現に転化する例も少なくない。例えば

- ・「遭受」(S44) → 「見舞われ」(T44)
- ・「感動」(S60) → 「心を打たれました」(T60)
- ・「遇到」(S116) → 「おかれようと」(T116)

さらに、品詞は変わらないが、異なる言い方で差し替える例も見られる。例えば

- ・「結爲好友」(良い友達になった)(S19) → 「親交を深めました」(T19) (動詞)
- ・「死亡線」(死亡の線)(S63) → 「死の危機」(T63) (名詞)
- ・「走」(歩む)(S165) → 「があります」(T165) (動詞)

3.3 反訳に関する分析

「反訳」は今回の分析サンプルではほとんど使われず、以下の2例のみである。

S57	廣大日本人民也是戰爭受害者，中國人民要同日本人民友好相處
T57	一般の日本国民も戦争の被害者であり、中国人民は日本国民と仲良く付き合わなければなりません
S168	要實現這兩大任務，必須推進兩大改革
T168	この二つの任務を達成するには二つの改革を推進しなければなりません

3.4 倒訳に関する分析

分析に入る前に「倒訳」について説明する。前述のとおり「倒訳」は順序を倒置して訳すことである。日中両言語間の文法構造を比較すると中国語はSVO(主語+動詞+目的語)、日本語はSOV(主語+目的語+動詞)であるため、中→日翻訳では動詞を後置しなければならず、すべての文は必然的に「倒訳」となる。それゆえ、「倒訳」についてさらに詳細な分類をしなければ分析は不可能である。

日中両言語間の語順の違いによる動詞の倒訳、つまり単なるSVOの文構造をSOVの文構造に直す状況を筆者は「文法的倒訳」と定義する。動詞が後置するほか、「為了～」→「～のために」、「如同～」→「～のように」、「在～」→「～において」のような動詞以外でも中日両言語の文法規則の違いによって訳出の語順に差異が生ずる。これも「文法的倒訳」として定義する。以下は「文法的倒訳」の具体例である。

S08	更想爲中日關係的改善和發展盡一份力 做一份貢獻
T08	さらには中日関係の改善と発展のために力を尽くし、貢献したいためであります
S09	如果說安倍晉三首相去年十月對中國的訪問是一次破冰之旅
T09	安倍総理大臣の昨年10月の中国訪問が氷を砕く旅であったと言うならば
S34	曾得到許多日本友人的支持與幫助
T34	多くの日本の友人たちから支持と支援を受けました
S51	在一個國家、一個民族的歷史發展進程中
T51	一国、一民族の歴史の発展の過程において
S193	爲開創中日戰略互惠關係的新局面
T193	中日両国の戦略的互惠関係の新たな局面を切り開くために

以上が「文法的倒訳」の実例である。しかし、今回の分析サンプルの中で「文法的倒訳」が一番多く使われた場面は「必要」の訳である。以下の例を見れば明らかである。

S12	爲了友誼與合作，需要繼承和發揚中日友好源遠流長的歷史傳統
-----	------------------------------

T12	友情と協力のために、長い中日友好の歴史の伝統を受け継ぎ、発揚する 必要があります
S41	爲了友誼與合作， 需要 總結和汲取不幸歲月的歷史教訓
T41	友情と協力のためには、不幸な歳月の歴史的教訓を総括し銘記する 必要があります
S191	開辟中日關係的美好未來 要靠 兩國政府和兩國人民的不懈努カ
T191	中日關係の美しい未來を切り開くために、兩國政府と兩國人民はたゆまぬ努カをしていく 必要が あります
S95	爲了友誼與合作， 需要 正確把握中日關係的發展方向
T95	友情と協力のために、中日關係的發展の方向を正しく把握する 必要があります
S108	爲實現這一目標， 需要 把握以下原則
T108	この目標を實現するため、次のような原則を把握する 必要があります

中国語の「需要」は英語の「NEED」に近く動詞にも名詞にもなるが、ここでは動詞として使われている。しかし日本語訳では品詞性が名詞へ転化し、しかも連体修飾という形で表現されている。これらの日本語訳を中国語に反訳（back translation）すると以下ようになる。

・「需要」（中国語）→「～必要があります」（日本語）→「有～的需要」（中国語）

異なる言語間では語が必ずしも同じ形態・品詞性で存在するとは限らないことがこの「需要」の例から明らかだ（日本語の「好き」は形容動詞だが中国語の「喜歡」と英語の「LIKE」が動詞であることも同様の例である）。語の品詞性が異なれば文構造も変化するため、訳出においては品詞性の異なる文の処理に気をつけなければならない。

さらに、日中両言語間の倒訳は、単に動詞と目的語を倒置するというせまい意味ではなく、クローズとクローズ、さらにセンテンスとセンテンスのあいだでも倒置するというように、広く理解すべきである。遠藤 1989)。その観点から見た「非文法的倒訳」の例は以下のとおりある。

S138	兩國經濟的發展對雙方來說 都是 機遇， 而不是 威脅
T138	兩國經濟的發展は、双方のいずれにとっても 脅威 ではなく チャンス です
T186	這對燈火至今 仍在 燃燒， 長明不滅 ， 遙相輝映
S186	この一組の燈籠は 今なお 消えることなく 燃え続け 、 はるか遠く から互いに照り映え

もし「倒訳」を使わず、原語の順番に従って T138 を訳すと「チャンスであり、脅威ではありません」になる。また、T186 も同様に「燃え続け、消えることはありません」となる。

3.4 分訳と合訳に関する分析

S11	爲友誼與合作而來，是我這次訪問日本的 目的 ，也是今天演講的 主題
T11	私は友情と協力のために貴国に参りました。 これが 正に私のこの度の日本訪問の 目的 であり、また本日の演説の テーマ でもあります
S71	中國北方的港口城市葫蘆島，曾經是侵華日軍運送石油的 地方
T71	中国北部の港町 コロ島 です。 ここは かつて中国を侵略した日本軍の石油運送の 地 でありました

かりに「分訳」せずに、原文の構造に従い、一文から一文に訳すと以下ようになる。

T11：友情と協力のために参った**というのが**、正に私のこの度の日本訪問の**目的**であり、また本日の演説の**テーマ**でもあります

T71：中国北部の港町**コロ島**はかつて中国を侵略した日本軍の石油運送の**地**でありました

「合訳」の例以下の一例のみであった。中国語の「學習」「生活」という二つの動詞を「留學生活」と

して訳出している。

S35	周恩来、魯迅、郭沫若先生先後在日本學習、生活
T35	周恩来、魯迅、郭沫若先生らの先達もかつて日本で留學生活を送り

以上は、遠藤紹徳が提示した7種類の中日翻訳技法に基いて分析を行った結果である。

4. 実例分析から見た結果

以上の実例分析を観察し、さらに分析結果を比較してみると、以下のようにまとめられる。

4.1 技巧と手法の回数から見た結果

各技法が使われた回数を統計し、以下の表にまとめた。(表2)

表2 遠藤紹徳による各技法が使われた回数

技 法	細かい分類	回数	百分率	回数	百分率
加訳	1 接続詞補足による加訳	7	2.85%	39	15.85%
	2 文の意味の補完による加訳	32	13.00%		
減訳	1 主語・数量詞の省略の減訳	3	1.22%	11	4.47%
	2 主語・数量詞の省略でない減訳	8	3.25%		
変訳	1 慣用句、ことわざ、常套句、 決まり文句の変訳	6	2.44%	47	19.11%
	2 品詞を変える変訳	7	2.85%		
	3 主動表現を受身表現に転化の変訳	3	1.22%		
	4 異なる言い方で差し替える変訳	31	12.60%		
反訳		3	1.22%	3	1.22%
倒訳	1 文法的倒訳	113	45.93%	116	47.15%
	2 非文法的倒訳	3	1.22%		
分訳		7	2.85%	7	2.85%
合訳		1	0.41%	1	0.41%
上記の技法を 何も使わない		22	8.94%	22	8.94%
合計		246	100%	246	100%

上記の統計から以下の特徴が見られる。

a) 「減訳」より「加訳」が多い

原文に補足説明を適宜加えることで聞き手にわかりやすくなる。ただし、同時通訳の時間的制約を考えれば訳出語数が少なくなる「減訳」がより好ましいはずである。しかし今回の通訳では「減訳」より「加訳」が多く使われている。それは演説者である温家宝の発話速度が大変遅く「加訳」ができる余裕があるためではないだろうか。筆者の計算では温家宝の発話速度は一秒に1.86字であり³⁾、余裕をもって同時通訳ができ、適当に「加訳」することも可能だろう。今回の発話者が早口であれば、おそらく「加訳」はそれほど多く使われなくなると予測される。

b) 「合訳」より「分訳」が多い

同時通訳で一文を二文に分けると訳出時間がかかるので、理論的には「分訳」より「合訳」の方が多用されるはずであるが、今回の通訳は「合訳」より「分訳」が多用されている。中国語では長すぎる連体修飾語が望ましくないという習慣と関連があるかもしれない。

c) 「変訳」が多く使われる

文法や表現が異なる言語間の翻訳通訳には、「変訳」という技法が多く使われることが、今回の統計で検証できた。異なる言語の間では、語が一对一で対応しない場合が多く、直訳より意識が重視される通訳の場面では、「変訳」はさらに避けられない。とくに今回の演説ではことわざや決まり文句などが随所に見られ、「変訳」を使わないと訳しにくい部分が多い。

4.2 通訳者の慣用技巧と手法

今回の分析と統計を経て、今回の通訳担当の通訳者の情報処理には、以下慣用手法がよくつかわれることが分かった。

a) 引用表現の所は必ず分訳

中国語の引用表現を表す動詞の「説」「講」「寫」などが現れると、以下の例にみられるように必ず二文に分割し、引用箇所最後に動詞をもう一度重複するように訳出している。

S25	去年十二月河野洋平議長在中國文化節開幕式上説
T25	昨年 12 月河野洋平議長は中国文化祭の開幕式で次のようにおっしゃいました
S26	日本文化傳統中散發著中國文化的濃郁馨香
T26	「日本文化の伝統に中国文化の香りが漂っていることは
S27	表明日中之間有著割捨不斷的因緣
T27	日中の間には切っても切れない縁があることの表れである」とこうおっしゃいました

S68	其中有一個碑文這樣寫道
T68	その中に次のような碑文があります
S69	我們對中國養父母的人道精神和慈愛之心深深地感激，此恩永世不忘
T69	そこには「われわれは中国養父母の人道的精神と慈愛心に深く感謝し、ご恩を永遠に忘れません」と記されています

S83	去年 6 月貴國前首相村山富市先生在參加葫蘆島紀念活動的時候曾經說過
T83	去年の 6 月貴国の村山富市元首相はこのコロ島で行われた記念イベントに出席した際に、このように述べておられます
S84	大遣返真正體現了中華民族的寬宏大量和中國人民的人道主義精神
T84	「大送還は、まさに中華民族の大きな度量と中国人民の人道主義精神の表れである」と述べられています

中国語の引用表現と日本語の引用表現は異なり、中国語の「他說……」や英語の「He says…」などなら後続するのは引用であることが分かる。しかし日本語の引用表現の「…と話す」は常に文末に位置

し、主語と遠く離れているため、最初から明らかではない。そこで分訳の手法を用い、文を分割し、情報を処理している。これは大変見事な訳し方である。かりに S68 の例文を分訳せずに、直接通訳すれば以下ようになる。

T68：その中にある碑文に「われわれは中国養父母の人道的精神と慈愛心に深く感謝し、ご恩を永遠に忘れません」と書いてあります

この訳文では主語と動詞が離れているため聞き手にとっては分かりにくい。ほかの S25 S26 S27、S83 S84 はさらに長いセンテンスで、動詞と主語がもっと遠く離れているため、分訳せず直訳したらもっと分かりにくくなるだろう。

b) 長い動詞後置・助詞後置がある

一般的には短期記憶に蓄えた情報はできるだけ早く産出すれば通訳者の記憶の負担にならない。中国語の SVO 構造と日本語の SOV 構造の関係で動詞を文末に移動するため、一時的に動詞を短期記憶に蓄えなければならないが、できるだけ早く出せば負担が少なくて済む。しかし今回の通訳分析サンプルの中には、長い動詞後置と助詞後置のところがいくつも見られる。

S73	記載了戦争刚刚结束不久，在交通不便、物资极度匮乏的条件下
T73	そこには戦争が終わって間もない頃、交通がまだ不便で物資が極度に乏しかった中で
S74	中国人民全力帮助 105 万日本侨民平安返回家园的历史一幕
T74	中国人民が全力を尽くして 105 万人の残留日本人を無事に帰国の途につかせた歴史的な一齣についてが記されています

S129	只要我們從戰略高度，以長遠眼光和對歷史負責的態度
T129	私どもが戦略的大所高所から、長期的視点に立って、そして歴史に対し責任ある態度で
S130	有誠意、有信心進行對話協商，雙方之間存在的問題總是找到妥善解決的辦法
T130	誠意と自信を持って、対話と協議を行いさえすれば、双方の間に横たわる問題を適切に解決する方法を必ず見出すことができます

S131	對於東海問題，兩國應該本著擱置爭議、共同開發的原則
T131	東シナ海の問題については、両国は係争を棚上げし、共同開発する原則に則って
S132	積極推進磋商的進程，在和平解決分歧上邁出實質的步伐
T132	協議の過程をプロセスを積極的に推進し、相違点の平和的解決のため実質的なステップを踏み出し
S133	使東海成爲和平、友好、合作之海
T133	東シナ海を平和・友好・協力の海にすべきです

S139	昨天我同安倍首相會談時，一致同意建立中日經濟高層對話機制
T139	昨日私と安倍総理大臣は会談において、中日ハイレベル経済対話メカニズムを設立し
S140	把兩國經濟合作提高到更高的水平
T140	両国の経済面での協力をより高いレベルへ引き上げていくことで一致しました

S157	我們也需要以這樣的的眼光，共同應對全球性的問題
T157	また、同じ視点に立って
S158	包括能源安全、環境保護、氣候變化、疾病防護
T158	エネルギーの安全など、また環境保全、氣候変動、疾病の予防と抑制
S159	以及反對恐怖主義、打擊跨國犯罪、防止大規模殺傷性武器的擴散等等
T159	及びテロ対策、多国籍犯罪の取り締まり、大量破壊兵器の拡散防止など地球規模の問題に 対応していく必要があります

以上は、原文中の動詞や助詞などの情報を訳文の大変速い所に後置した例である。S129 と S139 は 1 センテンス離れ、S131 は 2 センテンス、S159 は 3 センテンスも離れている。このような情報処理方法はたしかに記憶には大変負担になり、日中両言語の文構造・表現によってもたらされる通訳翻訳の問題点でもある。だが今回の通訳は原稿付の同時通訳であるため、記憶への負担は低減されている。

4.3 各翻訳技法の原稿付き同時通訳への応用の可能性

以上の実例分析を観察し、さらに分析結果を比較してみると、以下のようにまとめられる。

4.3.1 加訳と減訳

一般の翻訳の中で、接続詞を補う加訳も、文の意味をさらに補完するための「加訳」も、いずれもよく見られる技法であるが、今回の分析サンプルにも同じ現象が観察できる。「加訳」の使用回数は 39 箇所もある。原文にない言葉を適度に付け加えると、訳文がより分かりやすいものとなることは、上記の実例分析のなかでも明らかである。「加訳」は、翻訳・通訳のいずれにも応用できる技法と判断できるだろう。

「減訳」は今回の分析サンプルの中でそれほど多用されていない。日本語の表現習慣に合わせるため数量詞と主語を省略した「減訳」は通訳・翻訳のいずれにも共通する。しかし、数量詞と主語の省略以外の「減訳」はどうだろうか。前述の実例分析に見られる数量詞と主語以外の「減訳」(S14、S33、S48、S99、S166、S181) は、実は省略しなくても良いものである。逆に省略してしまうと、意味やニュアンスがある程度損なわれてしまう場合がある。

S99	兩國友好城市多達 233 對，人員往來超過 480 萬人次
T99	友好姉妹都市は 233 組に達し、人的往來は 480 万人を超えました

原文には「多達」という言葉があるが、これを残らずに確実に伝えるには訳文を以下のとおり修正したら良い。そうすると「多達」という微妙なニュアンスも伝えられるようになる。

T99：友好姉妹都市は 233 組にも達し、人的往來は 480 万人を超えました

情報を残さず確実に受け手に伝達するには、過度の「減訳」は避けるべきだ。数量詞と主語の省略以外の「減訳」は情報やニュアンスの漏れにつながるかもしれない。数量詞と主語の省略の「減訳」は翻訳でも通訳でも共通してみられるが、それ以外の「減訳」は、原稿付きの通訳に応用しようとするには、やはり多少不適切であるといわざるを得ない。

4.3.2 変訳

「変訳」は今回の分析サンプルの中で二番目に多く使用されている。前述のとおり統語構造が大きく異なる言語間の翻通訳では「変訳」が多用されることが今回の統計で検証できる。直訳より意識が重視される通訳の場面では、「変訳」の使用はより必要不可欠となる。

4.3.3 反訳

今回の分析サンプルの中では、あまり使用されていない技法である。日本語では「否定+否定」という表現が多いが、相対的にこのような二重否定の言い方にすると、文字数が増え、また聞き手にとっては意味を理解するために大きな負担となる。たとえば

S12	爲了友誼與合作，需要繼承和發揚中日友好源遠流長的歷史傳統
T12	友情と協力のために、長い中日友好の歴史の伝統を受け継ぎ、発揚する必要があります
S41	爲了友誼與合作，需要總結和汲取不幸歲月的歷史教訓
T41	友情と協力のためには、不幸な歳月の歴史的教訓を総括し銘記する必要があります
S104	面臨著需要共同應對的重大課題
T104	ともに対応すべき重要な課題に直面しています

以上の訳文をかりに「否定+否定」で訳してみると以下になる。

T12：友情と協力のために長い中日友好の歴史の伝統を受け継ぎ発揚しなければなりません

T41：友情と協力のためには、不幸な歳月の歴史的教訓を総括し銘記しなければなりません

T104：ともに対応しなければならない重要な課題に直面しています

以上のような二重否定文は通じないとは言えないが、単純な肯定文の方が分かりやすく、文字数も少ない。時間的に余裕があればもちろん「反訳」で二重否定文にすることは可能であるが、今回の分析サンプルの使用回数や実例分析から判断すると「反訳」という技法は同時通訳に応用するにはあまりふさわしくない技法であると判断する。

4.3.4 倒訳

原文の語順に従って順次に訳語を産出するいわゆる「順送り訳」が最もシンプルな同時通訳である。今回のサンプルでは「倒訳」の使用回数が一番多い。しかし、日中両言語の文法構造の差異に起因する必要不可欠な「倒訳」、つまり「文法的倒訳」を除けば、「非文法的倒訳」の使用回数はわずか3回しかない。

そもそも翻訳には「順送り訳」という技法はなく、「順送り訳」はサイトトランスレーションという同時通訳の技法である。翻訳の場合は訳文の語順を原文の語順にあわせる必要がないため、「倒訳」を多用しても何ら差し支えないが、同時通訳は訳文の語順を原文の語順と一致させた方が通訳を行いやすくなる。語順を倒置して先に出た言葉を後に通訳したり、或いは後に出てくる言葉を先取りしたりすると、「語句倒置」「文末予測」等の別の技法を併用しなければならなくなり、通訳の難度が高くなってしまう。

今回のサンプルでは「文法的倒訳」を除き、その他のほとんどの部分は「順送り訳」で行われている。使用回数からも、通訳者の手法からも、「倒訳」が同時通訳にはあまり応用できないこと、「順送り訳」が原稿付き同時通訳でも多用されることがわかる。今回のサンプルに現れる「順送り訳」の実例をまとめてみる。

S05	這是我第二次到貴國訪問，上一次是在十五年前也是在櫻花盛開的四月
T05	今回は私二回目の貴国訪問でございます。前回は15年前、同じく桜の満開の四月でした
S37	中日兩國友好交往歷時之久、規模之大、影響之深
T37	中日両国の友好往来は、その時間の長さ、規模の大きさと影響の深さは
S39	這是我們共同擁有的歷史傳統和文明財富

T39	これはわれわれが共有する歴史の伝統と文明の財産であります
S94	也是亞洲和國際社會的殷切期盼
T94	またアジアと国際社会の切実な期待でもあります
S147	青少年是國家的未來和希望，也是中日友好的未來和希望
T147	青少年は国家の未来と希望であり、中日友好の未来と希望でもあります
S151	中日兩國同為亞洲和世界的重要國家
T151	中日両国はいずれもアジアと世界における重要な国です

上記の例文から見ると「順送り訳」の例文はほとんど「です」「であります」のような「断定文」である。「断定文」が「順送り訳」に一番適した文型であるとの仮説にもとづき実際に統計してみると、195文で「順送り訳」が124例、全体の63.6%を占め、うち「断定文」は43例、「順送り訳」の文の約1/3を占めていることが分かった。

4.3.5 分訳と合訳

「分訳」と「合訳」は、今回のサンプルでは使用回数が少ない。前述のとおり、今回のサンプルでは引用表現があるところは必ず区切る、という手法が見られる。長文を短く区切れれば、通訳者にとっては訳しやすく、聞き手にとっては分かりやすくなる。よって、この「分訳」という情報処理手法は、翻訳だけでなく、同時通訳にも応用できると判断できる。しかし「合訳」の場合はまた異なる。二つのセンテンスを一つに合体させると、センテンス数は確かに減るが、センテンスは相対的に長くなる。また、センテンス中の情報も増えるから、聞き手にとってはかえって理解しにくくなる。以下に例をあげる。

S101	中國的改革開放和現代化建設得到了日本政府和人民的支持與幫助
T101	中国の改革開放と近代化建設は日本政府と国民から支持と支援を頂きました
S102	對此中國人民永遠不會忘記
T102	これを中国人民はいつまでも忘れません

かりにあえて「合訳」で以上の例文を訳してみると

T101：中国の改革開放と近代化建設では日本政府と国民から支持と支援を頂きましたが、これについて
中国人民は決して忘れることはありません。

このような訳文になる。長い連体修飾があり、通訳者の情報処理にも、聴衆の情報理解にも負担になる。今回の分析サンプルの中に「合訳」は一回しか使われていない。おそらく「合訳」は、原稿付き同時通訳に応用できる技法ではないと判断してよいであろう。

以上の結果を一覧表にまとめると以下のとおりである。

表3 各翻訳技法が原稿付き同時通訳における応用の可能性

技法	原稿付き同時通訳への応用	説明
加訳	可	
変訳	可	
分訳	可	
減訳	一部可	数量詞と主語の省略なら 可 原文の意味・ニュアンスを損なわなければ 可
反訳	一部可	時間的な余裕があれば 可

倒訳	不可	通訳の負担になるから 不可
合訳	不可	長文になると、通訳にも理解に聴衆の負担にもなるから 不可

5. おわりに

今回の同時通訳は、a) 原稿がある。 b) 発話者の速度が大変遅い。 c) 発話者が脱線せずに、原稿のとおり話す、という通訳者にとって三つの有利な条件がそろっていた。「発話速度が速すぎる」「情報量過多」など冒頭で述べた原稿付き同時通訳で生じ易い困難はなく、日中間の言語転換手法という点を集中的に観察できた。前述の表2のように、今回のサンプルでは、9割以上で翻訳技法が使われている。また分析によって文の転換の際に翻訳技法が使用されていることがわかった。そこで翻訳技法を原稿付き同時通訳に応用することが可能であると判断できる。

翻訳技法は原稿付き同時通訳の技法とほぼ共通しているが、唯一の相違点は「順送り訳」であり、この「順送り訳」だけが唯一、翻訳技法ではカバーできない。今回の分析サンプルでも「文法的倒訳」のような特別な状況を除けば、その他ほとんどの文章が原文の語順に従い、そのままの語順で訳されている。

本稿は温家宝首相の日本国会での演説を例として、中日翻訳技法を原稿読み上げ型の同時通訳に応用する可能性について分析を行った。今後さらに多くの通訳実例を収集し、通訳手法や技巧を分析することによって、より効果的な通訳法を見出し、さらにそれらが通訳教育と通訳訓練への応用につながっていくことを期待している。

【謝辞】 本稿執筆にあたり、大阪大学の藪田麻夕子先輩、古川典代先生からご協力を頂き、輔仁大学の楊承淑先生からご助言を頂きましたことに深く感謝を申し上げます。

著者紹介：丁紀祥 (Ting Chi Hsiang) 台湾・輔仁大学日本語学科卒業、南台科技大学大学院応用日本語研究科単位修了。現在大阪大学大学院言語社会研究科・地域言語社会専攻・通訳翻訳学専修コース博士前期課程在学中。 連絡先：pencil.sin@msa.hinet.net

【注】

- 1) サイマル・アカデミー講師ブログ [Online] <http://simulacademy.jp/>
- 2) もともと中国語の「残留」は動詞で、「的」を付け加えたら連体修飾になる。ここでの「残留的」というのは日本語の「取り残された」という意味になる。なので、中国語の「残留的」は動詞連体修飾形で、日本語の「取り残された」は動詞受身形になる。
- 3) 温家宝の演説の全長は34分55秒である。発話原稿の中の句点・読点・括弧・引用符などを取り外し、実際に発音できる文字の数だけ計算した。しかも、精密度と正確さを把握するため、アラビア数字も全部漢字に直してから、計算を行った。最終的に、演説の全文字数は3906字である。温家宝の発話速度は、3906字 / (34分×60秒+55秒) = 1.86字 / 秒、と推測することができる。

【参考文献】

[中国語]

方梦之(2004)《译学辞典》上海外语教育出版社

永田小絵(1997)〈日中同歩口訳探討〉《翻訳学研究集刊1》台湾翻訳学学会

周兆祥、周育沾(1998)《口譯的理論與實踐》台湾商務印書館

陸松齡(1996)《日漢翻譯芸術》台湾商務印書館

彭士晃(1997)《日訳中同歩口譯之訊息處理》台湾・輔仁大学大学院翻訳学研究科修士論文

靖立青(2001)《日漢翻譯技巧》鴻儒堂出版社

楊承淑(2008)《口訳的訊息處理過程研究》輔仁大学出版社

[日本語]

遠藤紹徳(1989)『中一日翻訳表現文法』バベル・プレス

塚本慶一(2003)『中国語通訳者への道』大修館書店

楊承淑(1990)「中文和訳と和文中訳における加訳・減訳への分析」『台湾日本語文研究会論文集2』
台湾日本語文研究会

[インターネット資料]

明報即時新聞 温家宝在日本國會演説

[Online] <http://www.mpinews.com/htm/INews/20070412/ca41521a.htm> (2008年8月29日)

中華人民共和国駐日本国大使館 日本国国会における温家宝総理の演説

[Online] <http://www.fmprc.gov.cn/ce/cejp/jpn/zrgx/t311936.htm> (2008年8月29日)

レコードチャイナ：温家宝首相の国会演説、日中友好を強調—日本東京

[Online] <http://www.recordchina.co.jp/group/g7221.html> (2008年8月29日)

